

Notes on Sheaves on Manifolds

大柴寿浩

はじめに

2023 年度から始めた [KS90] のセミナーのノート.

記号

次の記号は断りなく使う.

- 添字: なんらかの族 $(a_i)_{i \in I}$ を $(a_i)_i$ とか (a_i) と略記することがある.

1 ホモロジー代数

1.3 複体の圏

\mathcal{C} を加法圏とする.

注意. 加法圏とは次の 3 つの条件 (1)–(3) をみたす圏のことである.

- (1) どの対象 $X, Y \in \mathcal{C}$ に対しても $\mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ が加法群になり, どの対象 $X, Y, Z \in \mathcal{C}$ に対しても合成 $\circ: \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z) \times \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \rightarrow \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$ が双線型である.
- (2) 零対象 $0 \in \mathcal{C}$ が存在する. さらに $\mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(0, 0) = 0$ が成り立つ.
- (3) 任意の対象 $X, Y \in \mathcal{C}$ に対して積と余積が存在し, さらにそれらは同型になる. (それらを複積といい $X \oplus Y$ とかく.)

圏 \mathcal{C} から, \mathcal{C} の対象の複体の圏 $CC(\mathcal{C})$ を作ることができる. まず複体の定義をする. 圏 \mathcal{C} の対象のと射の列

$$(1.3.1) \quad \cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

を考える. この列 $X = ((X^n)_{n \in \mathbf{Z}}, (d_X^n)_{n \in \mathbf{Z}})$ が複体 (complex) であるとは, 任意の $n \in \mathbf{Z}$ に対し

$$(1.3.2) \quad d_X^{n+1} \circ d_X^n = 0$$

が成り立つことをいう.

圏 \mathcal{C} の対象の複体 $X = ((X^n), (d_X^n))$, $Y = ((Y^n), (d_Y^n))$ の間の射を, \mathcal{C} の射の族 $(f^n: X^n \rightarrow Y^n)_{n \in \mathbf{Z}}$ で, 図式

$$\begin{array}{ccccccc} \cdots & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \cdots & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \end{array}$$

を可換にする, すなわちどの番号 $n \in \mathbf{Z}$ に対しても

$$(1.3.3) \quad d_Y^n \circ f^n = f^{n+1} \circ d_X^n$$

が成り立つものとして定める.

以上の準備のもとで, \mathcal{C} の複体の圏 $C(\mathcal{C})$ を次のように定める.

- 対象: $\text{Ob}(C(\mathcal{C})) = \{\mathcal{C} \text{ の複体} \}$
- 射: $\text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) = \{\mathcal{C} \text{ の複体の射} \}$

このとき, $C(\mathcal{C})$ は加法圏になる.

圏になることの証明. $f: X \rightarrow Y$ と $g: Y \rightarrow Z$ を $C(\mathcal{C})$ の射とする. f と g の合成 $g \circ f$ は $(g^n \circ f^n)_n$ で与えられる. これがうまくいくことは

$$\begin{array}{ccccccc} \cdots & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \cdots & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \\ & & \downarrow g^n & & \downarrow g^{n+1} & & \\ \cdots & \longrightarrow & Z^n & \xrightarrow{d_Z^n} & Z^{n+1} & \longrightarrow & \cdots \end{array}$$

が可換になることからわかる.

X の恒等射は $(\text{id}_{X^n})_n$ で与えられる. □

加法圏になることの証明. X と Y を \mathcal{C} の複体とする.

(1) 射の集合のアーベル群構造 $f, g \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y)$ に対し, $f + g$ が $(f^n + g^n)_n$ で定まる.

(2) 零対象の存在 $C(\mathcal{C})$ の零対象 0 は

$$\cdots \rightarrow 0 \xrightarrow{0} 0 \xrightarrow{0} 0 \rightarrow \cdots$$

で与えられる.

(3) 複積の存在 X と Y の複積 $X \oplus Y$ は

$$\dots \longrightarrow X^{n-1} \oplus Y^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1} \oplus d_Y^{n-1}} X^n \oplus Y^n \xrightarrow{d_X^n \oplus d_Y^n} X^{n+1} \oplus Y^{n+1} \longrightarrow \dots$$

で与えられる. □

さらに \mathcal{C} がアーベル圏ならば, $C(\mathcal{C})$ もアーベル圏になる.

注意. 加法圏 \mathcal{C} がアーベル圏であるとは次の条件 (4), (5) をみたすことをいう.

(4) 任意の \mathcal{C} の射 $f: X \rightarrow Y$ に対し, f の核 $\text{Ker } f$ と余核 $\text{Coker } f$ が存在する.

(5) 任意の \mathcal{C} の射 $f: X \rightarrow Y$ に対し, 自然に定まる射 $\text{Coim } f \rightarrow \text{Im } f$ は同型である.

証明. X と Y を \mathcal{C} の複体とする.

(4) 核と余核の存在 複体の射 $f: X \rightarrow Y$ に対し, 核 $\text{Ker } f$ は $(\text{Ker } f^n)_n$ で, 余核 $\text{Coker } f$ は $(\text{Coker } f^n)_n$ で与えられる.

コメント (4/24). 「 $\text{Ker } f$ の differential の構成はどうなっていますか？」

次の図式を考える.

$$\begin{array}{ccccccc} \dots & \longrightarrow & \text{Ker } f^n & \xrightarrow{\bar{d}_X^n} & \text{Ker } f^{n+1} & \longrightarrow & \dots \\ & & \downarrow \iota^n & & \downarrow \iota^{n+1} & & \\ \dots & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \dots \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \dots & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \dots \end{array}$$

ここで, ι^n は $\text{Ker } f^n$ の普遍性から自然に定まる射である. $\bar{d}_X^n: \text{Ker } f^n \rightarrow \text{Ker } f^{n+1}$ が $d_X^n \circ \iota^n$ によって定められることを示せば良い.

$$f^{n+1} \circ d_X^n \circ \iota^n = d_Y^n \circ f^{n+1} \circ \iota^n = d_Y^n \circ 0 = 0$$

より, $d_X^n \circ \iota^n$ は $\text{Ker } f^{n+1}$ に値を取る. したがって, $\bar{d}_X^n: \text{Ker } f^n \rightarrow \text{Ker } f^{n+1}$ が定まる.

(5) 余像と像が同型になること 各次数 n ごとに $\text{Coim } f^n \cong \text{Im } f^n$ が成り立つことから従う. □

圏 $C(\mathcal{C})$ の充満部分圏 $C^+(\mathcal{C})$, $C^-(\mathcal{C})$, $C^b(\mathcal{C})$ を

$$\begin{aligned} \text{Ob}(C^+(\mathcal{C})) &= \left\{ 0 \rightarrow X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \rightarrow \dots \quad (n \leq 0) \right\}, \\ \text{Ob}(C^-(\mathcal{C})) &= \left\{ \dots \rightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \rightarrow 0 \quad (n \geq 0) \right\}, \\ \text{Ob}(C^b(\mathcal{C})) &= \{ 0 \rightarrow X^n \rightarrow \dots \rightarrow X^m \rightarrow 0 \quad (n \leq 0, m \geq 0) \} \end{aligned}$$

で定める.

\mathcal{C} の対象 X に対し $C(\mathcal{C})$ の対象

$$\cdots \rightarrow 0 \rightarrow X \rightarrow 0 \rightarrow \cdots$$

を対応させることによって、忠実充満な関手 $\mathcal{C} \hookrightarrow C(\mathcal{C})$ が定まる。

k を整数とする。 \mathcal{C} の複体

$$X: \cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

に対し、 $X[k]$ を $X[k]^n = X^{n+k}$, $d_{X[k]}^n = (-1)^k d_X^{n+k}$ で定める。図式でかくと

$$X[k]: \cdots \longrightarrow X^{n+k-1} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k-1}} X^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} X^{n+k+1} \longrightarrow \cdots$$

のようになる。 X から Y への射 $f: X \rightarrow Y$ に対し、 $f[k]: X[k] \rightarrow Y[k]$ を $f[k]^n = f^{n+k}$ で定める。 X を $X[k]$ に対応させることで関手 $[k]: C(\mathcal{C}) \rightarrow C(\mathcal{C})$ が定まる。この関手を次数 k のシフト関手と呼ぶ。

$[k]$ が関手になることの証明。 $X[k]$ が複体になること：

$$(-1)^k d_X^{n+k} \circ (-1)^k d_X^{n+k-1} = (-1)^{2k} d_X^{n+k} \circ d_X^{n+k-1} = 0.$$

$f[k]$ が複体の射になること：

$$\begin{array}{ccccccc} \cdots & \longrightarrow & X^{n+k} & \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} & X^{n+k+1} & \longrightarrow & \cdots \\ & & \downarrow f^{n+k} & & \downarrow f^{n+k+1} & & \\ \cdots & \longrightarrow & Y^{n+k} & \xrightarrow{(-1)^k d_Y^{n+k}} & Y^{n+k+1} & \longrightarrow & \cdots \end{array}$$

が可換になることを示せばよい。

$$f^{n+k+1} \circ (-1)^k d_X^{n+k+1} = (-1)^k f^{n+k+1} \circ d_X^{n+k+1} = (-1)^k d_Y^{n+k+1} \circ f^{n+k}.$$

$[k]$ が合成を保つこと： $f: X \rightarrow Y$, $g: Y \rightarrow Z$ を複体の射とする。このとき

$$(g[k] \circ f[k])^n = g[k]^n \circ f[k]^n = g^{n+k} \circ f^{n+k} = (g \circ f)^{n+k} = (g \circ f)[k]^n$$

が成り立つ。

$[k]$ が恒等射を保つこと： $\text{id}_X[k]^n = \text{id}_X^{n+k} = \text{id}_{X[k]}^n$. □

■ホモトピー \mathcal{C} の複体の圏 $C(\mathcal{C})$ から、ホモトピックな射を同一視することによって、新たな圏 $K(\mathcal{C})$ が得られる。まず準備。

$C(\mathcal{C})$ を圏 \mathcal{C} の複体の圏とする。 $X, Y \in C(\mathcal{C})$ とする。 $f: X \rightarrow Y$ が 0 にホモトピックであるとは、 \mathcal{C} の射の族 $(s^n: X^n \rightarrow Y^{n-1})$ で、

$$(1.3.4) \quad f^n = d_Y^{n-1} \circ s^n + s^{n+1} \circ d_X^n \quad (n \in \mathbf{Z})$$

となるものが存在することをいう。

$f, g: X \rightarrow Y$ に対し, $f - g$ が 0 にホモトピックであるとき, f と g はホモトピックであるといい, $f \simeq g$ とかく. f が 0 とホモトピックであることを $f \simeq 0$ で表す. このとき $s = (s^n)$ を f と g の間のホモトピーという. \simeq は同値関係である.

証明. f, g, h を X から Y への \mathcal{C} の複体の射とする.

反射律 $(s^n = 0)$ が f と f の間のホモトピーを与える.

対称律 f と g の間のホモトピーを s とするとき, $-s$ が g と f の間のホモトピーを与える.

推移律 f と g の間のホモトピーを s , g と h の間のホモトピーを t とする. このとき, $s + t$ が f と h の間のホモトピーを与える. \square

命題 1.1. $X, Y \in C(\mathcal{C})$ に対し, $\text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y)$ の加法部分群 $\text{Ht}(X, Y)$ を

$$(1.3.5) \quad \text{Ht}(X, Y) := \{f \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) \mid f \simeq 0\}$$

で定める. 複体の射 $f: X \rightarrow Y$ と $g: Y \rightarrow Z$ のどちらかが 0 にホモトピックならば, 合成 $g \circ f$ は 0 にホモトピックになる. したがって, 射の合成は次の写像をひきおこす.

$$\begin{aligned} \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(Y, Z) \times \text{Ht}(X, Y) &\rightarrow \text{Ht}(X, Z), \\ \text{Ht}(Y, Z) \times \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) &\rightarrow \text{Ht}(X, Z). \end{aligned}$$

証明. $f \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y)$, $g \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(Y, Z)$ とする.

$f \simeq 0$ のとき, s を 0 とのホモトピーとすると, $g \circ f$ と 0 との間のホモトピーは

$$(g^{n-1} \circ s^n: X^n \rightarrow Y^{n-1} \rightarrow Z^{n-1})_n$$

で与えられる.

$g \simeq 0$ のとき, t を 0 とのホモトピーとすると, $g \circ f$ と 0 との間のホモトピーは

$$(t^n \circ f^n: X^n \rightarrow Y^n \rightarrow Z^{n-1})_n$$

で与えられる. \square

以上の準備のもとで, 圏 \mathcal{C} のホモトピー圏 $K(\mathcal{C})$ を次のように定める.

- 対象: $\text{Ob}(K(\mathcal{C})) = \text{Ob}(C(\mathcal{C}))$
- 射: $\text{Hom}_{K(\mathcal{C})}(X, Y) = \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) / \text{Ht}(X, Y)$

$K(\mathcal{C})$ は加法圏になる.

$K(\mathcal{C})$ が加法圏になることの証明. 命題 1.1 より, 射の合成がきちんと定まる.

各 $X, Y \in K(\mathcal{C})$ に対する $\text{Hom}_{K(\mathcal{C})}(X, Y)$ のアーベル群構造は $\text{Ht}(X, Y)$ による剰余群の構造として得られ, さらに命題 1.1 より, 合成の双線型性が得られる.

零対象と複積は $C(\mathcal{C})$ と同様である. \square

圏 $K(\mathcal{C})$ の充満部分圏 $K^+(\mathcal{C})$, $K^-(\mathcal{C})$, $K^b(\mathcal{C})$ を, それぞれ $C^+(\mathcal{C})$, $C^-(\mathcal{C})$, $C^b(\mathcal{C})$ と同じ対象をとって定める.

■コホモロジー \mathcal{C} をアーベル圏とする． $X \in \mathbf{C}(\mathcal{C})$ に対し，

$$\begin{aligned} Z^k(X) &:= \operatorname{Ker} d_X^k, \\ B^k(X) &:= \operatorname{Im} d_X^{k-1}, \\ H^k(X) &:= \operatorname{Ker} d_X^k / \operatorname{Im} d_X^{k-1} \end{aligned}$$

とおく． $H^k(X)$ を複体 X の k 次のコホモロジーという．

注意．完全列 $0 \rightarrow X \rightarrow Y \rightarrow Z \rightarrow 0$ に対し， Z を Y の商対象といい， Y/X とかく． 一般に単射 $i: X \hookrightarrow Y$ の余核 $\operatorname{Coker} i$ を Y/X とかける．

任意の k に対し H^k は $\mathbf{C}(\mathcal{C})$ から \mathcal{C} への加法関手を定める．

$$(1.3.6) \quad H^k(X) = H^0(X[k])$$

$f: X \rightarrow Y$ が 0 とホモトピックならば， $H^k(f): H^k(X) \rightarrow H^k(Y)$ は 0． よって H^k は $\mathbf{K}(\mathcal{C})$ から \mathcal{C} への関手を定める．

完全列たち

$$\begin{aligned} X^{k-1} &\rightarrow Z^k(X) \rightarrow H^k(X) \rightarrow 0, \\ 0 &\rightarrow H^k(X) \rightarrow \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \rightarrow X^{k+1}, \\ 0 &\rightarrow Z^{k-1}(X) \rightarrow X^{k-1} \rightarrow B^k(X) \rightarrow 0, \\ 0 &\rightarrow B^k(X) \rightarrow X^k \rightarrow \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \rightarrow 0, \\ 0 &\rightarrow H^k(X) \rightarrow \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \xrightarrow{d_X^k} Z^{k+1}(X) \rightarrow H^{k+1}(X) \rightarrow 0. \end{aligned}$$

命題 1.2. $0 \rightarrow X \rightarrow Y \rightarrow Z \rightarrow 0$ を $\mathbf{C}(\mathcal{C})$ の完全列とする． このとき， \mathcal{C} における次の長完全列が存在する．

$$\cdots \rightarrow H^n(X) \rightarrow H^n(Y) \rightarrow H^n(Z) \xrightarrow{\delta} H^{n+1}(X) \rightarrow \cdots$$

■切り落とし $X \in \mathbf{C}(\mathcal{C})$ と整数 n に対し， $\tau^{\leq n}(X), \tau^{\geq n}(X) \in \mathbf{C}(\mathcal{C})$ を

$$(1.3.7) \quad \tau^{\leq n}(X): \cdots \rightarrow X^{n-2} \rightarrow X^{n-1} \rightarrow \operatorname{Ker} d^n \rightarrow 0 \rightarrow \cdots,$$

$$(1.3.8) \quad \tau^{\geq n}(X): \cdots 0 \rightarrow \operatorname{Coker} d^{n-1} \rightarrow X^{n+1} \rightarrow X^{n+2} \rightarrow \cdots$$

で定める． このとき， $\mathbf{C}(\mathcal{C})$ における次の射が得られる．

$$\tau^{\leq n}(X) \rightarrow X, \quad X \rightarrow \tau^{\geq n}(X),$$

また， $n' \leq n$ ならば

$$\tau^{\leq n'}(X) \rightarrow \tau^{\leq n}(X), \quad \tau^{\geq n'}(X) \rightarrow \tau^{\geq n}(X).$$

- 命題 1.3.** 1. 自然な射 $H^k(\tau^{\leq n}(X)) \rightarrow H^k(X)$ は $k \leq n$ ならば同型であり, $k > n$ では $H^k(X) = 0$ である.
2. 自然な射 $H^k(X) \rightarrow H^k(\tau^{\geq n}(X))$ は $k \geq n$ ならば同型であり, $k < n$ では $H^k(X) = 0$ である.

注意 1.4. ホモトピー同値

1.4 写像錐

\mathcal{C} を加法圏とし $f: X \rightarrow Y$ を $C(\mathcal{C})$ の射とする.

定義 1.5. f の写像錐 $M(f)$ とは次で定まる $C(\mathcal{C})$ の対象である.

$$\begin{cases} M(f)^n = X^{n+1} \oplus Y^n, \\ d_{M(f)}^n = \begin{bmatrix} d_{X[1]}^n & 0 \\ f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix} \end{cases}$$

射 $\alpha(f): Y \rightarrow M(f)$ と $\beta(f): M(f) \rightarrow X[1]$ を次で定める.

$$(1.4.1) \quad \alpha(f)^n = \begin{bmatrix} 0 \\ \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix},$$

$$(1.4.2) \quad \beta(f)^n = [\text{id}_{X^{n+1}} \quad 0].$$

コメント (4/24). 「どうして逆に $X \rightarrow M(f)$ や $M(f) \rightarrow Y$ じゃないんですか？」

例えば, 逆に $\gamma^n: M(f)^n \rightarrow Y^n$ を $\begin{bmatrix} 0 & \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix}$ で定めようとしても,

$$\begin{aligned} \gamma^{n+1} \circ d_{M(f)}^n &= \begin{bmatrix} 0 & \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} d_{X[1]}^n & 0 \\ f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix}, \\ d_Y^n \circ \gamma^n &= d_Y^n \circ \begin{bmatrix} 0 & \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & d_Y^n \end{bmatrix} \end{aligned}$$

となり, 両者は一致しない. したがって, γ は複体の射にならない. $X \rightarrow M(f)$ も同様である. したがって, $M(f)$ に対して定まる自然な射は α, β のようにせざるを得ない.

補題 1.6. 任意の $C(\mathcal{C})$ の射 $f: N \rightarrow Y$ に対し, $\phi: X[1] \rightarrow M(\alpha(f))$ で次の条件をみたすものが存在する.

1. ϕ は $K(\mathcal{C})$ で同型である,
2. 次の図式は $K(\mathcal{C})$ で可換になる:

$$\begin{array}{ccccccc} Y & \xrightarrow{\alpha(f)} & M(f) & \xrightarrow{\beta(f)} & X[1] & \xrightarrow{-f[1]} & Y[1] \\ \downarrow \text{id}_Y & & \downarrow \text{id}_{M(f)} & & \downarrow \phi & & \downarrow \text{id}_{Y[1]} \\ Y & \xrightarrow{\alpha(f)} & M(f) & \xrightarrow{\alpha(\alpha(f))} & M(\alpha(f)) & \xrightarrow{\beta(\alpha(f))} & Y[1]. \end{array}$$

2023/05/01

1.5 三角圏

\mathcal{C} を加法圏とし, $T: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}$ を自己関手とする. \mathcal{C} の三角とは射の列

$$X \rightarrow Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$$

のことである.

定義 1.7. 三角圏 \mathcal{C} は次のデータ (1.5.1), (1.5.2) と規則 (TR0)–(TR5) からなる. 1.7

データ

(1.5.1) 加法圏 \mathcal{C} と自己関手 $T: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}$ の組,

(1.5.2) 特三角 (distinguished triangle) の族.

規則 (TR0) 特三角に同形な三角は特三角である.

(TR1) 任意の対象 $X \in \mathcal{C}$ に対し, $X \xrightarrow{\text{id}_X} X \rightarrow 0 \rightarrow T(X)$ は特三角である.

(TR2) \mathcal{C} の任意の射 $f: X \rightarrow Y$ は特三角 $X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$ に埋め込める. つまり $Z \in \mathcal{C}$ で $X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$ が特三角となるものが存在する.

(TR3) $X \xrightarrow{f} Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X)$ が特三角であることと $Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X) \xrightarrow{-T(f)} T(Y)$ が特三角であることは同値である.

(TR4) 2つの特三角 $X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$, $X' \xrightarrow{f'} Y' \rightarrow Z' \rightarrow T(X')$ に対し, 可換図式

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{f} & Y \\ \downarrow u & & \downarrow v \\ X' & \xrightarrow{f'} & Y' \end{array}$$

は特三角の射に埋め込める.

(TR5) (八面体公理). 3つの特三角

$$X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z' \rightarrow T(X),$$

$$Y \xrightarrow{g} Z \rightarrow X' \rightarrow T(Y),$$

$$X \xrightarrow{g \circ f} Z \rightarrow Y' \rightarrow T(X)$$

に対し,

1.6 圏の局所化

参考文献

- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Sheaves on Manifolds*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [KS06] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Categories and Sheaves*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 332, Springer, 2006.
- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.